

## 「真夜中の少年」 選評

立原正秋

ここ数年の間、中間小説が量産されすぎ、質が落ちたという声をしばしば耳にします。どうやらこれは事実のようです。そうした時点を踏まえて周囲を見回しますと、平忠夫氏の「真夜中の少年」の当選は動かせないことと思えました。「文学界」向きではないかとの声もありましたが、しかし、気がついていながら、見て見ぬふりをするわけにはまいりませんでした。(中略)今回は質の違う作品が二作当選となりましたが、「真夜中の少年」については、あるいは読者からも、「オール読物」的ではないといった声があがるかも知れません。しかしこの辺で小説の質の低下を防いでおかないと、中間小説雑誌はエロ小説になり講談雑誌になる気がします。今日ほど雑誌の数が多く出ている時代はかつてなかったでしょう。そこにまぎれこんだ書き手が神の量に流され、しまいにはぼろぼろになってゆく時代です。こうしたことも心にとどめておいた方がいいかと考えます。

遠藤周作

(前略)「地虫」(難波利三)と「真夜中の少年」が最後に残り、南條、駒田の両委員が「地虫」を、立原、曾野の両氏と私とが「真夜中の少年」をおすという結果になったが、私の考えから言うと「地虫」は手なれた小説であるけれど、これまでの「オール読物」新人賞作品によくあつた型の小説であり、そういう意味で新鮮味に乏しい。(中略)その点に比べると「真夜中の少年」には新しい魅力があり、今後の新人賞の応募者にも「オール読物」はこういう作品をも認める幅を持つという意味でおしたのである。(ただし、この小説は文章の整理が多少、必要だと思つた)(後略)

## 駒田信一

(前略) 平龍生氏の「真夜中の少年」は遠藤委員が強く推した。その理由は同氏が書かれると思うが、私は選考委員会に出る前までは、「た。」「た。」「た。」という短い文章の羅列を、小説の文体ではないように思っていたのだが、遠藤氏の説明をきいているうちに、そのテーマとともにこういう文体にも工夫があるのかもしれないと思い、そういえばそれなりに「た。」「た。」の羅列の中から、一種の無気味な響きが出てくると思いなおして、当選作とするならそれもよからうと、賛成したのである。(後略)

南條範夫

(前略) 「真夜中の少年」——この作はむしろ文学界向きではないかと思うのだが、本賞の幅を広げる意味においては、当選作として結構である。この作品に漂う不気味な雰囲気は認めるが、その幻想が独りよがりの点があり、まだ十分に読者まで同化させるに至っていないように思う。(後略)

曾野綾子

何がいい小説かを決めることのむずかしさを改めて、考えさせられた。いつものことではあるが、最終審査に残された小説の殆（ほとんど）どは、実に達者である。小説の作り方を心憎いほど心得ているという感じである。どこをどう抑えて、型にはめれば、きちつと仕上るということがちゃんと見えている方達ばかりだと思う。

しかし小説はそんなふうにして、人形焼きでも焼くように巧者なお話を作り上げることではあるまい。そんな意味で、私は今回は迷うことはなかった。

「真夜中の少年」だけに文学を感じた。

これは一種のアスファルト・ジヤングルを描いた恐怖小説である。ひゅーいと音を立てて上がって来るエレベーターの中の、現実とあやめもつかぬうつとうしい世界が、人間の心をしん浸蝕（しんしよく）し、分裂させる。もう少しとってしまえば、もつと、冷たく輝くのではないかと思う部分もあるが、それは私の一方的な好みである。この作品には小説に大切な強引な感覚と余韻が私には感じられる。（後略）